

「あーあ、これじゃ、まったく陸の孤島、私たちが、隔離病棟に容れられているなものよ」

、楽しかるべき大学一年生の始まりであった。が、学生寮の窓から見える半ば散った桜を眼にした時、すでにうら淋しい気分になった。

美里も負けてはいなかった。

「だからあ、まず車を持つてる男の子を掴まえるのよ。まかせておきなつて」

備え付けの木製ベッドの上で、美里は二、三度バウンドしてみせた。

肉付きのいい尻が気持よさそうに弾んだ。

美里が大学一年生になって最初にやることは先ずボーイハントをすることだった。

先輩連中からこの学生生活の情報はあるこれ聞かされていたので、男と女の交際学に美里は大いなる興味を持っていたのであった。

左知子だって、これまでの受験勉強の鬱憤を春の季節に一気に晴らしたい思いになっていた。

ここの学生たちの生活環境はまったく素晴らしく出来ていた。

近くに筑波の山々を控え、広大なキャンパスの敷地内には、高層建築群が立ち並んでいる。もともと街そのものが学区内で、他に科学、自然環境、医学などの研究機関が設けられていた。スポーツ施設、それに学生寮なども万全で、勉学を志す

若者たちには絶好の環境が用意されていた。

美里と同室で住むことになったこの女子寮は八畳の寝室兼居間とリビンググキツチンの六畳二室に、浴室と便所がある。南向きのテラス部分にも観葉植物ぐらいならおけそうなスペースがあった。

二人の居室は六階だったから、天気の良い日は霞ヶ浦の湖面を遠くに望むことも出来た。

自然環境と人工的な都市空間、なによりごみごみしたせせつこましさがないのがよかった。

だが、広々とした都市空間なのに、どこから集まってくるのか、授業が始まると、結構人の数が多くなった。ここは若者の街であった。

野球場やテニスコート、サッカー場などでは若者たちが春の陽を一杯に浴びて、青春のひとつときを楽しんでいた。

グラウンドの回りの芝生席では若い男女の学生が仲睦じく肩を寄せ合っていたりする。

どこへ行くにも左知子と美里は二人一緒だった。まだ新入生の気分が抜けなかった。

教育学部に籍をおいていた二人は、揃って史学研究会に入った。歴史のロマンとわれわれ自身のロマンを求めて！。そんな勧誘の文句も気に入った。新人歓迎コンパが開かれることになって、左知子と美里は早速たばこを自動販売機で買い求めた。酒屋に寄ってウイスキーも買った。

喫ったことはないのに、自室で二人は一人前の顔をしてたばこに火を点けた。コンパに出て馬鹿にされないためのちよつと無理をした予行演習だった。こんな時、いつも意気がるのは左知子のほうだった。口だけですばすとふかしている美里に差をつけるために、左知子は胸深くたばこの煙をのみ込んだ。少しむせたが、

「どうってことない」と胸を張る。

そのうち気分が悪くなり、顔色がまっさおにな

った。じーんと耳鳴りがしていて、脂汗が額に滲んだ。

「大人になるってのはたいへんなのね」

ベッドの上に転って体を休めた。それでも強がりを一言言った。

「わたし、こわーいことが二つあるの」

「へえー、聞いたげる」

胸がまだむかむかしているのに左知子は、こわいことこに関心を向けた。

美里は白地に赤い縁どりをあしらった可愛い感じのネグリジエを着ていた。

「大人になるってことはあ、あれとあれをしなきゃなんないのよね」

「はつきり言いなさいよ」

「セックスと赤ちゃん生むことオ」

「美里、それなりに考えてるのね」

「あったりまえじゃない。わたしね、ぜったいに十九になるまでに経験しちゃう」

「ベビーちゃんのほうも」

「ばーか、男よ、男とやっちゃうってことオ」

「でもこわいんでしょ」

「わたし、なんでも痛ーいの嫌なのね。注射だつて息が止まりそうになるの」

「エッチするのつて痛いの？」

「よく知らないけどさ。みんな死ぬほど痛かったつて」

「愛があれば痛くないって、ふふ、わたしはセックスより愛が欲しいな」

「なによ、左知子、この前わたしは情欲の鬼だなんて凄いいこと言ったくせに」

「経験したら学校なんてどうでもいいってことになるだろうなと思ったの。わたし、その点では怖い女の人だから」

「やきもちやき？」

「かなりね。相手も自分もいじめぬくのが好き」

「それじゃサド、マゾじゃない」

「言えてる。だからこわーいの」

「変な人と一緒になっちゃったあ」

二人は他愛のない会話を交わした。

「ね、お酒のほうも鍛えておく？」

「いいね、派手にやろうよ」

コップに半分ほどウイスキーを入れ、氷片を落し込む。ハイボール仕立ての酒を、無理して、佐知子は、一気飲みした。

琥珀色の溶液には、これからの二人の青春を力づける何かが、あるように思われた。

「カンパニー！」

「残酷で、それでもって、光り輝やくわが青春たちだね」

「それ、かなりよ」

美里が左知子のことばに酔ったようたことを言った。二つのグラスがかちんと合わさり、あとは一気に熱い溶液が咽喉元を通り過ぎた。

2

「ここは性の解放区だからさ。言うなれば天国と地獄が背中合わせ。恋をしなければ失恋もないぞ。泣けるうちが華、ぽっぽつと咲いて、散ったらまた咲かなくちゃあな。そう、散った桜もまた桜だ」

史学研究会のリーダーである上級生の男がそんな前説を述べたてた。

新入生歓迎コンパだったのが、新入りは左知子と美里の他に、二人しかいなかった。

集まったのは十一人であった。

洒落た感じの白壁のレストランは、二階、三階部分がホテルになっていた。特設の宴会場がある

三階の一室がコンパ会場であった。

初めに坐る場所がくじで決められた。それで左知子と美里は離れ離れになった。

左知子の左隣りにはこの時、斉木和彦が坐った。男が一人多いので、両手に華の女子学生が一人出ることになる。その席は美里が引き当てた。

あとになって知らされたことだが、男子学生が女子学生の左隣りの席を占めるのは、新婚初夜の時のならベッドインの作法に慣ったものであった。いろんなあそびがあることを知った。

先輩の女子学生の一人が、チェリーピンクのプレイを見事にやってのけた。マンハッタン・カクテルが特別注文され運ばれて来た。

女子学生の一人は、カクテルグラスに飾られたマラスキーノ・チェリーをひよいと指で孤み上げた。口中に含む。

左隣りの斉木和彦がエスコート役になったつもりか解説を加えてくれた。

「カノジョはさ、ここのグループじゃキスがいちばん上手な女ってことになってるんだ。口の中で舌を使って、チェリーの柄の部分で結びの輪を作るんだよ。それだけ舌先が器用ってわけ」

彼はデイベキスの処方について述べたのだった。左知子はあまり、プレイを楽しんでいる女子学生の顔は見ていなかった。

テーブルランプのろうそく式の明りだけの部屋はかなり暗かった。

和彦の横顔ばかりを見ていた。

眼鏡を掛けているのが嫌だったが、端正な顔立ちをしていた。それだけにどこにでも居そうな男に見えたが、生れ、育ちのよさがみてとれて好感が持てた。少し気の弱そうな感じもあって女心をくすぐるところもあった。

「もう、そろそろだな」

と、和彦が左知子の耳元に囁いた。

みんな、合いの手を入れ、拍手をし、そして口笛を吹いたりした。

女子学生は半ば口を開け、時には唇を突き出すようにする。舌を操っているわけだから、見ている者にはかなりセクシイな唇の表情であった。やがて女子学生は指でOKマークを示してみせた。

「二十七秒！ やったね！」

と、誰れかが終了宣言の時を告げた。

「見せ場はこれからだよ」

マンハッタン・カクテルを一口のんでから、女子学生は左隣りの男子学生と熱い口づけを交わした。拍手と口笛に迎えられる。

長いキスで、彼女の巧みな舌先は、相手の口の中で躍っているかに見えた。

彼女の左隣りの席を引き当てた男子学生がなにか落着かず、終始にこにこ顔だったわけが、やっと、左知子や美里にもわかった。

コンパはこの時が初めてであったが、何カ月かが経つうちにすっかり左知子も付き合い方のルールを習得した。

初めて知り合った和彦ともその後何回か会ったが、彼は一対一になるとだらしがなかった。

とりとめもない話ばかりで、左知子の期待に反して男と女の話に言及することはなかった。

美里は初めからついていて、入学して半年でもう派手な男あそびに熱中するようになった。

夏休みが始まる前、合いコンパのメンバーに美里だけが選ばれた。体育大学の男子学生の連中が勝手にメンバーを選出した。

中に通ずる者がいて男子学生同士、ナンパ可能な女の子のメンバー交換をしたのだった。

この時は左知子は惨めな思いをした。

メンバーにも選ばれず、その上、話相手になっ

てくれると思った和彦が期末考査が終ると、早々に旅に出ると告げて、東京に帰ってしまったからだ。お陰で喫茶店で和彦相手にダべることも出来なかつた。一人でシャワー室に入る。

自分の貧相な体のことが思われた。

性的魅力に欠けていた。

女の友達連中は、スリムでいいじゃない、と賞めてるふうのことを言ったが、かえって左知子は反発心を持った。

美里のバストは八十三ある。男たちの視線が美里の胸元に集まるのを左知子は知っていた。

この日、夜遅く、一人の男に送られて美里は女子寮に帰って来た。かなり酔っていた。

ベッドにあお向けになるなり、美里は得意気にこの夜あったことをしゃべり出した。

「合いコンで、もう、狎（な）れ狎れしいんだからあ。男の子のマンションに集まってさ。あれ、おさわりバーって言うんだって。ねえね、左知子、隣の部屋ではさ、出来合ったカップルがホンバンなの、あーあ、ずいぶんと気分出ちやつたあ。わたしの相手した男、ハードルの大学選手権のチャンピオンでさ。もうあつかましいったらあ、凄いの、それでわたしGまで行っちゃったあ、あー、今夜はわたし眠れそうにないからね」

つまり、レベルGのヘビーペッティングまで、美里は経験したと言うことだった。

「わたし夏休みまで持たないなっ」

美里は浮かれたことを言った。

「ネクラじや喪失も無理みたい」

左知子が自虐的なことを口にする。

「こわーいけど、わたしあの男にあげちゃおう」

「ハードルじや障害物競走ってことになるの？」

ちよっぴり皮肉を込めたつもりで左知子は応じてやる。

「いいの、一回きりなら」

何だか自分の言いたい台詞を美里に代弁されているようで左知子は面白くなかった。

自分の予定表を作るのが好きで、左知子は受験勉強の時もきちんとそれをやり遂げた。

大学一年生のスケジュール表を繰るとしたら、少なくとも夏の終りまでには女の儀式を了える気ということになる。

受験勉強をしていた時は夕飯を食べてから二時間ほど寝た。それで起き出してから午前三時まで勉強をした。頭ばかりが冴えているので、よく眠れるよう自慰の行為を行なった。

満足感はなかったが、こんなものだと自分に言い聞かせた。

この苦しい試練の時を了えたら、自分の青春が花咲くのだと信じ込んでもいた。性の感覚も、人並みにすすんだものになると期待感を抱いて来た。ところが、見聞きすることの一つ一つが、小さな挫折につながった。

余りに落差が大きいのだった。

それだけではない。

すでにこの時期、左知子の肉体は、忌むべきあの病巣を育てていたのであった。一年生の終りを迎える頃には、下腹にしくしくした痛みも生ずるようになった。器械体操のクラブに入ることもこの時点であきらめた。

それでも気持だけはまだ活発な女の子だった。

秋の学園祭の時はかなり頑張り、一年生の全体会議では書記をつとめた。

コンパなどでも、左知子の「イツキ」は名物になったりした。父親譲りなのかアルコールには強かった。男子学生にけしかけられるといい気になって、注がれたウイスキーを一気にのんだ。「左知子の一気」と名がついた。

男に負けず勇壮なところをみせた。
その点では左知子は男子学生の間では人気があったのであった。

3

和彦と美里ははじめのうちはまったくの他人同士のよな顔をしていた。美里が体育大学の例の男と、たった一度の性の関係を持ったことを、和彦は左知子の口から聞いて知っていた。

知った仲の和彦も、左知子には積極的には近付いて来なかった。この学園都市では明暗がはつきりしていて、一年生の夏の終りまでに初体験しない女は、就職時にホズを嘔むことありとされた。

どれもこれも、いい加減な話だったが、就職試験の面接を受ける際の見映えのために、女子学生の中には、実際に、整形手術を受ける者もあるくらいだったから、あながち、この手の話は誇張でもない一面もあった。つまり、美人でも性的アツピール度がなければ、恋の落ちこぼれに身を落とされ、かつ、就職試験でも、不利な場面に立たされることありとされたのだった。

大学構内には土浦などの市街地に通じる私鉄バスが入っていたが、不便なことには変わりはない。若い男女だけの解放区と言えば恰好はよかったが、左知子はここでは憧れていた恋の関係も持てずにいた。

とうとう左知子は三年生になつある日、ファイヤーゲームの執行者となった。六月も末のことで、やがて、夏休みが始まろうというのに、まだ、梅雨の名残りの雨が降っていた。

立会い者は、和彦と美里の二人であった。

左知子から言わせれば、これは、三角関係の罪の清算ということになる。和彦は、左知子にも美

里にも手を出した男で、他にもう一人進行中の恋人のような女が彼にはいた。

凶式を言えば、和彦と美里の訣別式の主催者の役を佐知子がかつて出たのであった。

この春先、左知子は土浦市内に出た時、ひよこを三羽買った。

掌のぬくもりの中でぴよぴよと鳴くひよこことあそんでいるうちに、ペットにしたくなつた。

左知子が飼い出したら、他の女子学生の何人かもわざわざ土浦市に出掛けて行き、数人がひよこを買ってきて、自室やベランダなどで飼い始めた。寮の規則では違反だったが、可愛いのでみんなひよこに夢中になつた。

ひよこの好きな女の子は、あまり男子学生にはちやほやされない連中が多かつた。

その点ではこの事実を左知子も認めずにはいられなかつた。

「ね、卵を生むまで飼うつもり？」

同居者の美里は、ひよこのうちは頼ずりなどして、羽毛の柔らかな感触を楽しんでいたが、二ヵ月もたつた頃には、ひよこには見向きもしなくなつた。

ひよこは雄ばかりで凶体ばかりが大きくなつて来、気味悪くもなつた。

とさかが発達し、白い羽毛があらわれた。

ぴよぴよと身を寄せ合つて鳴いているうちはよかつたが、餌を啄（つい）ばみ、大きくなるにつれ、若鶏の兆候を全身に表わすようになった。

卵からまだ出たばかりだと思つていたのに、体長も十センチを少し超えた。

相変らず、ぴよぴよとうるさく鳴くのでまだひよこには違いなかつたが、日一日、ペットの可愛いさは失くなつて行つた。

ボール箱に空気抜き穴をいくつも開け、ベラ

ンダに出しておいたら、大人びた感じの嘴（くちばし）を突き出す。不気味でさえあった。

ずいぶんと左知子は可愛がっていたが、さすがに部屋の中では飼えないようになった。

あたたかで、柔らかな感触をこれまでには左知子は愉しんだ。男に抱かれるために美里が外出したあと、よく左知子は裾広がりのネグリジェの中にひよこたちを呼集させた。

ネグリジェの下にはなにも着けていなかった。

「ばーち、ちーち、ちーこ、出ておいで」

勝手にそう名を付けて呼んでいた。

ぬくもりのある内腿にきまってひよこたちは身を寄せて来る。三羽とも、左知子の股間にあるものが何であるかも知らないで体をくっつけて来た。あつたかくて、とても気持のいい感触であった。きつと、ひよこたちも、ちよつとした幸福感をその心地良さの感触の中に見つけ出しているに違いなかった。

セックスってこんなにあつたかくて、気持ちいものならいいなあ……

何度か左知子はそんなことを夢想していた。

二十になっていた。性への憧れの気持だけは、いまもきれいなままだった。

が、ある日を境いにすっかり、ひよこたちが嫌いになった。そのことは和彦に責任のあることだった。その和彦の罪をも同時に罰するために、左知子は「ファイヤーゲーム」の立会人の一人として和彦を選んだのだった。

もう夏なのに、梅雨寒で、重ね着をした。左知子も美里もカーディガンを羽織っていた。雨は上

っていたが空にはまだ厚い雲が残っていた。
女子寮の屋上に和彦を誘った。

七階の空の上だから学園都市の区画を望むことができた。西北の方角になる山岳地帯のあたりは雨に閉ざされているのか何も見えなかった。

数日前から左知子は屋上の片隅で五羽のひよこを飼っていた。ベットの始末に困った女子学生から、二羽を貰い受けて来た。

「小学校の教材に欲しいって話があったの」
ありもしない話を口にした。

貯水タンクの陰に木箱を据え、その中で左知子は五羽のひよこを飼った。

ファイヤーゲームを始める前に、使い残しの灯油を携帯用の四リットル入り容器に集めた。

ほぼ三分の二の量はあった。

「まったく女はわからないよ。二人して、いやんなっちゃうな。二人ともこわい顔をてよ。いやんなっちゃうよ」ぼそりと和彦が言った。

「黙ってついてくればいいのよ」

左知子は取り合わなかった。

「ぼくはこういう話のつけ方、好きじゃないんだよな」

まだ口の中でぶつぶつ言っている。

しきりに和彦は眼鏡の縁に手をやった。

足元のコンクリート床にはところどころに雨水が貯まっていた。三人は水たまりを避けながらいちばん外れの貯水槽の場所まで歩いた。

左知子が先頭を切り、その後に和彦がいた。美里は五メートルほど後の位置にいた。

何だか気のすすまぬふうの歩様だった。

左知子が木箱に近付くと餌でも貰えると思ったのかひよこたちがぴよぴよと鳴声をあげた。

「まさか、バーベキューにするんじゃないだろうな」

木箱の傍らのポリエチレン容器を眼に止めて和彦が言う。

「さあ？火遊びの結末っていうのをお目に掛けるのよ」

「そんな、なにを言っているのかぼくにはわからないよ」 気弱なもの言いになった。

「それじゃ言うっておくけどね、美里はね、きのう一晩泣き明かしたのよ。あなたときっぱり別れる決心をしたの。だから、もう彼女には近寄らないで」

「まいったな。こんなところで別れ話か」

「ええ、そうよ。そのための儀式をね、わたしがしてあげようと言うのよ」

「……………」

剣幕に押されて和彦は黙ってしまった。

相変らず、美里は離れた場所に立っていた。

カーディガンを肩に掛け、寒そうに背を丸めていた。こちら一言も発しない。

「さあ、美里も協力して！ファイヤーゲーム女のあそびなんだから」

左知子は五羽のひよこのうち、四羽を美里に預けた。木箱で蓋をされていたので、羽毛は雨に濡れてはいない。

ふわふわした羽毛の感じと柔らかさがあった。

美里はコンクリート床の上にかがみ込んだ。

「逃げないようにね、スカートの中に入れておけばいいの」

四羽の扱いに困っている美里に左知子が助言を与えた。美里は言われた通りに、ひよこを脚の間で囲った。

その時、ちらと股間の白いパンティが左知子には見えた。その部分を罰してやりたいという思いに左知子は駆られていた。

別れ話に左知子が力を貸す気になったのは、

和彦の、気まぐれさと性のルーズさ^①が許せなくなつたからである。

実のところ、ファイヤーゲームは三角関係の清算のためというよりは、四角関係のもつれに一矢を報いる手段なのかも知れなかつた。

和彦には、一年先輩の夫婦気取りの女子学生がいた。左知子と美里が入学した時にはすでにその関係は進行中だった。同棲していたのではないのだが、二人はこの学園村の慣い通り、お互いの欲望処理のためにほどよい付き合いをして来たのだった。

なにしろ学生結婚も花盛りの学園村では、夫婦者の学生を入居させる施設も整っているくらいで、子供を育てる間だけ休学する女子学生も少なくなかつた。

和彦の相手をしてくれた女子学生は今年の春卒業し、大手の出版社に勤めた。それで、和彦との仲は自然解消ということになった。

お互いに恨みっこなし、結婚を約束したわけでもないから、それっ切りになつた。

それだからというわけでもないのだが、和彦は今度は美里をセックスフレンドに選んだ。

と、いつて、和彦にナンパの腕があつたのでもなかつた。ほどほどに生れ育ちがよくて、容姿も整っている男子学生なら、学園村では別に女に不自由はしなかつた。それが、ある日懐しげに先輩の女がやって来て、三日も泊りがけで、和彦とセックスプレイを愉しんで帰つた。

その結果の、本日のファイヤーゲームの始まりであつた。

「いい、このファイヤーゲームはね、ここの女子寮の伝統的なプレイの一つなの。今日、執り行うことはね。わたしと美里で考えたことなのよ」

左知子はわたしということばの語感を強めてみせる。たしかに一人の男を巡る女たちの鞘当（さやあて）での行為だったが、左知子が感情の赴むくままに企んだ。

これは和彦と美里の仲を引き裂くための計らいだとも言えた。

「ね、可愛いひよこでしょ。一匹百円、売りに出されるのはみんな雄のひよこよ」

左知子の両の掌の中には一羽のひよこが包まれていた。少し重そうでもある。

「これは、わたしが飼っていたちーちよ。ねえ、可愛いと思う？」

あまり関係のないことを左知子が言った。

「なにが始まるか、もうぼくにはわかっていないよ」

「ファイヤーゲームをするのにはね、ちゃんと資格がいるのよ。男にね、恨みを持った女のこれはおあそび、ねえ、何か質問ある？」

「ぼくは見物人のつもりだよ」

「まるで反省心ないのね、せめて見学人になったら？教えられることだって多いのよ」

左知子は今度は乱暴にひよこを扱った。コンクリート床の上におろし、首のあたりを右手の指で押さえ込んだ。

ひよこは苦しそうにもがいた。

「そうね、和彦にもちゃんと参加して欲しいからあ、なた、美里と代って！」

「ああ、何でもしてやるさ」

この時、和彦は開き直ったふうの口をきいた。少しだけ反抗心を示した。

「それじゃ、和彦はね……」

一年先輩なのに、いつの間にか、和彦と呼び捨てにした。それだけ、左知子から見れば、和彦は子供に見えたのだ。言ってみれば頼りない

感じなのである。

和彦は命じられた通りのことをした。

四羽のひよこを地表の上で、腕で囲った。

下は濡れているのに平気で坐り込んだ。ジー
ンズが水に濡れた。

二本の腕で輪を作り、その中に四羽のひよこ
を囲っていたので、上体をコンクリート面すれ
すれに近づげる。窮屈な恰好であった。

小顔で、眼の細い女を和彦は精一杯にらみ返
した。一体この女、頭の中で何を考えている
のだろう。この学園都市では男と女のこととはみ
んプレイなのだから俺には何の責任もないとも
和彦は考えていた。

水に濡れたジーンズに、冷めたいコンクリー
ト、上半身を折ったこの姿勢も屈辱的だった。
嫌な女だ、と、改めて、口の中で呟く。

一メートル先きに左知子が立っている。

和彦は上眼遣いに左知子の動作を追った。

親指と人差し指の二本でひよこの首を掴み取っ
ていた。二本の脚でひよこは空を蹴った。

和彦にはそのひよこの脚は大人びた気味の悪
いものに見えた。何だか鱗が生えているように
も思えた。ひよこの可愛さなどない。

一人前にもう前趾（ぜんし）の爪は尖ってい
て、その抵抗ぶりだと、引っ搔かれたら、何条
もの血の筋が浮いてくるだろうと思われた。

左知子は、灯油の容器の蓋を開け、片手で把
手を持った。手の中のひよこが身にふりかかる
異変を察してか、また首を伸ばし、二本の脚を
動かせた。その一羽のひよこの鳴声に呼応する
かのように、和彦の手の囲いの中にある四羽の
ひよこも、なにやら騒ぎ立てた。

選り取った一羽のひよこの全身に左知子はた
っぷり灯油を浴びせた。

左知子はコンクリート地表の上に坐り込んでいた。細い脚の間でひよこはずぶ濡れの哀れた姿に変えられた。ふわふわしていた羽毛はたちまちのうちに見窄（みすぼ）らしい衣裳に代わってしまう。ぶるぶると、寒いのか、首を震わせている。ひよこは瞼を閉じる。つぶらな瞳だったのに、瞼はもう死んだ細胞の一つになっていた。

わずかに、瞼が動左知子の足元にも灯油がこぼれ落ちていた。立上ると、一步退き、あらためて、灯油のこぼれ落ちた地点に、また灯油を撒く。

「和彦はその位置で待機していて！そのまま腕でひよこを囲っているのよ」

背後に美里がいるのはわかっていた。だが、和彦は振り返らなかった。

「美里、そんなところに突つ立っていないでさあ、煙草に火を付けてわたしに渡してちょうだい」

これで三人ともファイヤーゲームの参加者になれるというわけだった。

その時、和彦の思考は停止していた。

左知子の吊り上った眼の表情に気圧されていて、すっかりその場の霧囲気に吞まれていた。

左知子の言うまま、和彦は操り人形の一つにされていたのであった。

「いいわたしがね、放してって言ったら囲みを解いて！間髪を入れずよ」

コンクリート面から立つ揮発の香気を左知子は嗅いでいた。

準備完了であった。

左知子が和彦のほうを振り返り目配せした。

すでに、左知子の右の手には、美里から受け取った火の付いた煙草があった。

左知子は一服煙草を吸ってみせた。
灰色の光景ばかりがあたりには広がっていた。
風も冷めたい。先端の火が勃（おこ）った。
左知子が煙草の火を搔き立てた。

それから、たっぷり灯油のこぼされた地点（
マークポイント）から五十センチ先の場所に、
灯油に濡れそぼれた仲間外れのひよこを保持し
た。和彦が囲っているひよこたちは、一メート
ル五十センチほど向うの位置にいる。

灯油の染みた円の地点を距てて、仲間外れの
ひよここと、四羽グループは対峙（たいじ）して
いた。左知子は火の付いた煙草を右手に一度
掲げてから、手の中のひよこを解き放ち、同時
に煙草の火を灯油で濡れたひよこに近付けた。

あつという間の出来事であった。

同時に左知子が、「放して！」と叫んだ。

仲間外れの一羽のひよこが、瞬間に、火達
磨になった。和彦は弾かれたように囲みを解い
ていた。火の塊りになったひよこが、五、六歩
、走った。まるで誘導されたみたいに、灯油の
染みた円の領域に駆け込んだ。

ごおつと凄まじい音がし、コンクリート面が
瞬時に灼かれていた。火の柱が立つ。

と、これは一体、どうしたことなのか。和彦
が放った四羽のひよこたちが一斉に、いままさ
に、焼きつくされようとしている先導の一羽の
そばに駆け寄っていたのであった。

一羽、また一羽……いや、見ている者にはそ
れは集団自殺者の堵列（とれつ）の行進とも見
えた。火の勃り立つ海の中に、四羽が四羽とも
離れた一メートル地点から真直線に駆けた。

焰（ほのお）に包まれた囀（おと）りのひ

よこが、何か危急の叫びを發したのであろうか
。四羽のひよこは、火の淵に立つと、前脚を折

るようにして火の海の中に身を投げた。

見る間にふわふわしていた羽毛に火が移った。火に吞まれていた。

左知子もこのような様を目にするのは、初めてのことだった。あまりの見事な結末にしばしことばを忘れた。

「あーつ、あ、あ……」

和彦は背後に、美里の悲鳴にも似た叫びの声を聞いた。もう、黒焦げになった先導のひよこは、元の形を止どめてはいなかった。

四羽のひよこは身を寄せ合うようにし、火の真只中で脚を折っていた。

赫（あか）いかがり火というよりは、透けた白透色の火の明りであった。

火はまだ生きており、焰の先は勢い立っていた。もう、生きものの、動きは完全に止められていた。燃え盛る火の中で、ひよこたちは折り重なったまま動かなかった。

一陣の風がコンクリート地表を撫でて過ぎた。火が地表を這うようにして燃え立つ。

急に火の勢いが失なわれた。

ちろちろとコンクリート面を舐める火になっていた。和彦はふーっと一つ、肩で大きく息を継いだ。火のあそびに、今の今まで魅せられていた。わずか三十秒ばかりの時間だったが、ここには凝縮された、緊張の間があった。

それにしても、このひよこたちの整序の行為は何と解釈付けなければならないのだろう。

和彦は自分に向けられた火のあそびだということは忘れて、まだ、眼の前で起きた焼殺行為の余韻の中に身を置いていた。

「これはね、男に憎しみの炎を向けるためのあそびなのよ。このあそびを初めて考え出した女の子はね、電車に身を投げて死んだんだって……」

…」

「まさか…」と言いかけたが、この時、和彦は、あまりの言いざまに口を噤（つぐ）んだ。

左知子は抑揚のない喋り方でこれだけのことを告げた。左知子の眼はあらぬ中空に向けられていて、しばし瞼も動かなかつた。

和彦は、死んだ瞼になっていたひよこの閉じた瞼のことを思い出していた。

どこか、爬虫類の気味悪さの感じと通じるものがあつた。「うつつ、う…」美里が顔を伏せ、肩を震わせて泣き始めた。

「泣いてる場合じゃないわよ。死体の後始末をしなくちゃね」

左知子は、ポリエチレン容器を傾むけ、折り返なつたひよこの死体の上にさらに灯油を浴びせた。また、新たな火が立つた。

今度は、はつきり、肉の焼け焦げる匂いがした。ふいっと風も立った。

「あたたかお望みのバーベキューよ。どう？」

またもに、左知子に見詰められ、和彦は思わず、視線を外らせた。

「いい、もう美里のそばには近寄らないって約束してよ」

和彦は口を尖らせた。

何か言おうとしていたがことばを呑んだ。

「あの女の人とはもう関係ないって言いたいでしょ。ほんとう、あなたって煮え切らないんだから。ご馳走してやるって言ったらどこの家だだって上り込むんでしょ。女なら誰れだっさいいってわけ？」

なおも詰問した。

「なんとでも言つてよ。いいんだ、ぼくは…」

「なにがあ？」

「後始末ぐらい自分でやるさ。きみたちはもう

退場してくれよ」

「その心掛けを忘れないで。焼却炉までちゃんと持って行くのよ。死体をね、五つ」

口元で和彦は笑ってみせたが、頬のあたりは引き吊っていた。

「美里、いつまでめそめそしているのよ。さあ、行きましょ。わたしたち、わざわざこの人にさよなら言う必要もないのよ」

さつさと和彦の前を通り過ぎ、左知子は美里を引き連れて屋上口に向った。

やっぱり、山の方角は雨が降っているようであつた。白い雨曝（うばく）が西北方向の山肌には漂っていた。二人の女の姿が消えると、屋上は急に広く見えた。

寒さも感じた。

女たちが姿を消したあと、和彦は「ちえつ、まったく嫌な女だ」と眩やき、舌打ちした。

だが心は冷えていた。

ファイヤーゲームは終わっていたが、その場所からはうっすらと煙が上っていた。薄気味の悪い脚の部分だけがまだ形をそこに残していた。黒焦げになっていたが、三本の前趾の爪先は、まだ、しっかりと空間を掴み取っていた。

ふと、その枯枝のような脚を見ているうちに、和彦は、左知子の削（そ）げた内腿のことを思い出した。美里は知らないことだったが、春の初め、和彦と左知子はいくつかの関係になりかけた。その時のことが、和彦の脳裏にはふーと甦るって来たのであつた。

それは三年目を迎える春先のある日のことだつた。和彦と女子寮の一室で二人つきりにな

った時、左知子はなにか危険なものを感じた。丁度、和彦はセックスフレンドの一年先輩の女の子と別れたばかりのときで、美里や左知子にも急に狎（な）れ狎れしい態度を示すようになっていた。

入学して以来、左知子は何人かの男子学生と付き合った。だがなかなか体の関係までには行きつけずにいた。

なにしろ同室の美里には聞かされっ放しで、左知子は口惜しい思いをしていた。

もつとも、左知子はすでに、男との経験をしたふうのことを美里には語っていた。外国からの留学生であるスイス国籍の青年と何回かデートをした。学園都市の研究施設の一つである環境衛生学研究所の研究生で、スイスの大学から派遣されていた。相手はこの外国人だと言うことになっていた。

左知子は春休みだったので、川越に帰ろうと考えたが一人居残った。

美里は早々に三月の初めに自分の家に帰っていた。史学研究会のメンバーと、埼玉県の行田市にある埼玉古墳群を訪ねる話があつて、参加を希望したので帰省が遅れたのであつた。

一雨ごとに春は近付いていたが、この頃、左知子の病巣は、かなりすすんだ病状を示すようになっていた。

立居振舞いに支障はなかったが、自覚症状はあつた。月経不順に肌の荒れ、それに原因不明の熱が出たり、下腹にも不快な引き攣（つ）れを感じが生じ始めていたのであつた。

花曇りの空を窓から見ていたら「ああ、明日あたりは雨が降るに違いない」とそんな予感があった。体の変調でこの頃もう雨の気配を知るようになっていた。一人だけで部屋にいたら、な

んだか侘（わび）しい思いになった。

その時、和彦が女子寮に訪ねて来たのだった。とんとんと扉を叩かれた時、人恋しさのあまり、すぐに扉のところへ飛んで行った。

「ぼくだけど、いる？」和彦の声がした。

左知子をそれは呼んでいる声だった。美里が帰省していることは和彦だって知っている。

すっかり左知子は嬉しくなった。

レギュラーの女の子がいたので遠慮していたが、その女が卒業してこの学園都市からいなくなったのだから、今がチャンスだと思った。

一年ぐらいなら和彦のセックスフレンドになってやってもいいとも考えていた。

ここに来て二年が経った。

新学期が始まればもう三年生になる。

学生生活の半分を左知子は無為に過ごしてしまつたような気になっていた。

まだ男とのことを未経験というのは不具にも等しい。青春の日一日が無為に過ぎて行くようで、とても辛いことであつた。

左知子は喜んで扉を開けた。

「ひま、ひまあ、若い男が体を持って余してるんだものな」

初めから思わせぶりなことを言った。

「コーヒーブレイクにする？」

「うん、初めはコーヒー、あとは。残り香嗅いで、成り行きまかせ、か」

どこで覚えたのか、和彦はまたまた意味シンなことばを口にした。インスタントコーヒーを二人してのむ。

「ねえね、佐知子、自己開発しちゃったんだって？そのお、噂によると。ふふ、外人様だものね。美里は口が軽いからさ」

左知子はうまく行つたと思つた。

スイス人の青年との性の儀式のことを、美里の耳にはうんと吹き込んでおいた。

有りもしない話だったが、週刊誌の性の記事や、何とかレポートというセックス研究書のさわりの部分をつなげて、それらしく、自分の体験話にした。

「わたしがあ、初体験？まさかあ、高二でも、ちよつとあつたのよね」また嘘を重ねた。

「いま、恋人募集中？」

「でもないけどさ。ね、この村ではさ、今、男が体を貸すの流行ってんだ」

「男の子、みんなレンタル屋さんばかりなんだからあ、恋の深遠な哲理には目覚めていないのよね」

「お互いさまじゃない。ぼくたち明日のことはわかっちゃいないんだもの」

こんな面倒な会話を交わしているのは、和彦が気弱な男だったからだ。

雰囲気を作るのが下手だったせいもある。

この日、左知子は決して体の調子はよくなかった。熱ぽつたい知覚が病巣部にあつて、体を動かすのもおっくうだった。

それでも、和彦を眼の前にしたことで、自分の体のことは忘れた。

部屋は真中にアコーディオンカーテンがあり、一応のところ美里のベッドのある居住区と分れていた。半分に仕切られていると部屋はとても狭く見えた。

左知子はダイニングキッチンの場所からベッドのある部屋にと和彦を招じ入れた。

コーヒーカーブが空になった時、和彦がもう黙った。ぎらついた男の眼であつて欲しいと和彦の眼を見返す。

やっぱり気弱なのか、和彦は眼を伏せるよう

にした。それで、つと立ち上り、左知子が先導して次の部屋に入ったのであった。

「和彦、こちらへ来たら」

左知子は試してやる気になっていた。

和彦が好きだったのではない。

最初のコンパで隣り合わせになった時は、やさしい感じがあったので好ましい男に見えたが、どこか頼りないところがあってそれ以上は好きになれなかった。

いわゆる、和彦は母性本能をくすぐるタイプの男の子だったが、左知子には、女の本性は欠けていた。試してみるというのは、美里にご執心だった和彦の心変りのほどを、探ってみようということだった。

そのくせ、男の肉体のことにも興味が湧いていた。和彦に体を与えれば、美里へのご執心は断たれることになり、左知子は和彦を所有することが出来る―その機会を得るひとときが用意されていた。

もつともそれは左知子が頭の中で考えたことで、ベッドの前に立った左知子の表情は硬く、動作もぎこちないものだった。

和彦は、いきなり、左知子を押し倒した。

ベッドの上にもつれ込んでいた。

口づけをされていた。熱ぼったい感覚が唇の部分だけにある。口がふさがれていたので息が出来なくなった。

それで和彦の顔を両手で押しつけ、唇を外らせた。拒否したように見えたのか、和彦が左知子の両頬を両手で挟み、左知子の顔を固定させておいて、もう一度唇を合わせて来た。

やっと和彦の煙草の香りを嗅ぎとった。

初めての口づけだったので左知子には余裕がなかったのだ。

「ああ、わたし経験しおやおう……」男の匂いを嗅いだらもう許す気になった。

頭のどこかに美里に勝ち誇りたい気持ちもあった。和彦は性急に胸元に手を入れて来た。

乳首に指が触れた時、全身が総毛立つような触感が走った。ブラジャーは着けていなかった。長袖のトレーナーが剥かれ、乳房のあたりまで押し上げられた。

裸のままの両の乳房が男の視線にさらされた。「あ、見られている……」咄嗟にそんな感情が働らき、左知子は自分の両の手で、剥かれた裸の部分を蔽った。

貧弱な、小さな乳房を見られたくなかった。

それとなく男たちが誘っても積極的にならなかったのは、男のような胸を見られたくたかったからであった。

和彦は、両手で隠された乳房にはそれ以上の関心は示さなかった。

もう、男だけの欲望を優先させた。

左知子の腰にとりつき、スカートをまくし上げると、白いショーツにさつと手を掛けた。

引きおろされる時までにはじつとしていた。

左知子は従順な女になった。

和彦が今度は自分自身の身仕度を整えた。

うつすらと眼を開け、左知子は和彦が下着をとる様子を眺めていた。白いブリーフの下のものは、はつきりと突起の状態を示していた。

次に股間にあるものを見た。左知子は下から見ていたので、とてつもなく大きなものに思えた。「わたし、今から経験する」案外と、自分が醒めた状態にあるのに驚ろいた。

はつきり言えばまだ受入れるための心の準備はそれほど出来てはいなかったのだ。

たぶんに、これはことの成行きで、覚悟して

の行為ではなかった。まだ、腰にはスカートだけが巻きついているのに、もう和彦は挑みかかって来た。細い二本の脚を乱暴に取扱われた。ぐいっと右左に分けられた。

和彦の指が、裂口部を探った。なにもそんなこと恐いことでも何でもないわ」と、いつか、佐知子に告げた美里のことばに反発したわけでもないのだが、その文句を思い出し、自分を勇気付けた。

それなのに、左知子は、両脚を固く閉じてしまった。和彦の指は股間に挟み付けられたままだった。それで、和彦は一からやり直した。

抗（あらが）いの態度にも見えた。

両腿に両手を添え、脚を割りにかかった。あまりに、乱暴な行為に思えたので、この時、左知子は少しばかり抵抗する気になった。

内腿に力を入れた。だが男の力は強い。揉み合う恰好になり、その拍子に、下腹部に強い力が加わった。

「うっ！」とその時、左知子は呻き声を放った。下腹部の左脇の奥所に鋭い痛みが走った。

それなのに和彦はお構いなく、なおも左知子の下半身にのしかかって来た。逃げるために腰を捻り、上体をもたげようとした時、また、びりつと来る痛みに襲われた。

「止めて！もう止めてつたら……」

左知子は思わず叫んでいた。

はつきりとその時、病巣部の奥所を射たれていた。あまりの痛さに、顔面が蒼白になった。

額から脂汗が流れた。

やっと、驚ろいた和彦が体を離す。

「ごめん、ね、どうかしたの？」

ベッドの上に半身起した左知子の眼の前に、和彦の股間にあるものが見えた。

まだ、腹壁に添ったままで突起の状態にあった。

「だめなの、わたし、今日は……」

「だめって？だからさ、ほくやさしくするよ」

「そんなことじゃないの。和彦にはわからないことよ」

「いいじゃないか。ぼく……」

未練たつぷりの態度だった。

だが、左知子は着衣を捨て身にまとった。

ちよっと毅然とした態度だったので、和彦は付け入ることが出来ず、この場は終わった。

左知子にとっては初めて終りの性体験となった。和彦はこれに懲りたのか、左知子にはもう誘いを掛けこなくなった。

6

三年生の授業が始まったばかりの頃、左知子は一度川越の実家に呼び戻された。

父の梯吉が、木から落ち、家では一騒動があった。二週間ほどこの時は、家に居て、父の看病をやらされた。

この時、母の芳枝から色々と相談を持ち掛けられた。大工仕事は日銭稼業なので、これからの収入が絶たれるかも知れないと言われた。

母は左知子の学資稼ぎにこの時はスーパーコーストアの惣菜工場で働いていたが、月々もらうパートタイムの金では学資は出せそうにないと深刻な顔をして言った。

結論は出さぬまま、左知子は筑波学園都市に戻った。左知子は、自分が留守をしている間に、和彦と美里が男と女の関係になったことを知った。急に二人は押れ押れしくなった。

男たちのことを、開けっ広げの調子で語って

聞かせた美里が、男の話をしなくなったのも憶測の一つの理由となった。

和彦と甘い関係になりかけたことを、美里に語って聞かせてやろうと思ったが、体の秘密のことを美里に知られるのが嫌で、左知子は口にしなかった。

だが、それだけに、左知子の妬心は内に籠ったものとなった。美里の、ちよつと得意気な顔や、快活そうな立居振舞いが気に障った。

シャワー室から出て来て、バスタオルだけで体を蔽っている時の美里の奔放な肢態までが、わざとらしいものに見えた。

ある夜、和彦が、橋口という名の体育大学の学生を連れ、女子寮を訪れた。

この男の名は左知子も知っていた。

ウイスキーのボトル持参でやって来たので、賑やかな夜になった。

五月の半ば、窓を開け放つと、爽やかな風が吹き込んで来た。

窓の向うには、サッカー場のある丘が見えていて、黒い森がその背後には控えていた。

橋口はサッカー部の選手で来春卒業だったがもう就職は内定していた。気楽な身分だった。

赤いスポーツカーも持っていたので大いにもて女たちともたつぷり楽しんでいた。

美里が言ったように、酒を呑み始めると、橋口はさつさと上衣を脱ぎ捨て裸になった。

女の前で、いつも自分の鍛練された肉体を見せびらかすのがこの男の癖なのだった。

たしかに近くで見ると、逞しい肉体をしている。上腕部の筋肉の張りに胸板の厚さ、顔だつて精悍に見えたので、一見の価値はあった。左知子は胸の筋肉に触れてみたい気にもなった。

「さあ、これぐらいかなあ」

橋口は両手を開き、二度、閉じたり開いたりしてみせた。和彦が、橋口のこれまでの戦果を問うたので、両手の指で数を示してみせたのだった。

「セックスはスポーツだもんな」

「それじゃ、体も鍛えられてよかったあ」

と、佐知子が橋口に答えた。

「そうだよ。男の部分も、あれって、筋肉だって言うものな」

橋口はまともに答えを返してきた。

左知子は皮肉を言ったつもりだったのだ。

とつぜん訪れたこの傍若無人（ぼうじゃくぶじん）の男を、左知子は決して快よくは迎え入れていなかった。

「ね、今度、カノジョとのセックスシーン、よかったら君たち、今度、見学してみる？筋肉美の祭典、まさしくスポーツそのものだよ」

「わー、わたし見てみたい」

これには美里がすぐに応じた。

「わたし、記念に写真撮ったげようか。写メして上げてもいいよ」

「うへっ、やばいよ、そんなの、脅迫のネタになっちやうもんな」

と、橋口はあらためて左知子の顔を見返し

「こわい、こわい」と付け足した。

「あら、筋肉美のスポーツ学でしょ。卒論のページを飾れると思ったのに」

「だったら、これまでのこと、全部記録しておけばよかったあ。はは」

左知子と橋口の話はそれ以上は進展しなかった。学園村の中での男女の相姦図などがあとには面白おかしく語られた。男たちとよろしくプレイを楽しんだあと、大学院生や研究生などの前途有望な人材をちやっかり結婚相手に選んだ女

子学生もかなりいると橋口は吹聴した。

ボトルを一本開けた時、いつものお遊びになった。コンパの時などにやるもので、ダーテイファイヤーゲームと謂（い）う。黒いボトルの底に少しだけウイスキーが残された。

橋口は煙草の煙りを、ボトルの口に吹き込んだ。白い煙がもふわーとボトルの中に広がった。黒い硝子の肌を通してなので、白い煙はちよつと幻想的なシチュエーションをそこに用意した。それからボトルを両手に持ち、三十秒ほども攪拌してみせた。

シエーカーを振る手付きは見事だった。

「さあ、火遊びの始まりだ」

橋口のことばに心得て、美里が部屋の明りを消した。男二人、女二人の黒い影が居間で次の展開を待つ。左知子の隣りに橋口はいた。向い側にはベッドを背に和彦と美里が坐っていた。

マッチを橋口が手にする。

ごそごそと半パンツのポケットを探り取り出したのは、どこでも、軸頭を擦れば火の付くマッチだった。遊び慣れている橋口は、器用な手付きで、瞬時にマッチを擦った。

半ズボンのジーバン地でさつと軸頭を擦った。ぱちっ！そんな音がして火が付いた。

黒いボトルの中に、火軸を投げ込む、底に落ちた火は、四十三度のアルコールに引火した。ぼおつと火炎が立つ。黒いガラス壇の中で、青い火と白い煙が絡まった。白い煙が光の中に浮き出される。美しい火の世界が、テーブルの上に飾り立てられていた。

和彦と美里が唇を合わせている。

左知子は、橋口の口づけを待ったが、無視

された。この場合、隣り合わせたものは、口づけをお互いに許すのがエチケットだった。

左知子は、ただ、眼の前の和彦と美里の口づけのシーンを見ていた。

ボトルの中の限られた火は十二、三秒で燃えつきた。ガラスの面をひと撫でしたら青白い火は、闇に呑まれた。

ルールでは、火が燃えつきるまでだったが、いつまでも眼の前の二人は唇を合わせている。

「おいおい、^ま時は彼方^まに通リ過ぎたよ。お前たちも、火遊びはこれでおしまい」

橋口が終了宣言をしたので、やっと二人は体を唇した。さつさと左知子が部屋の明りを灯した。蛍光色の光を一杯に浴びた男と女がいる。

上半身裸だった橋口は脱ぎ捨てたTシャツをすっぽりと頭からかぶった。和彦と美里は、まだ余韻のさめやらぬ顔をしている。

「さあ、おれはもう帰るよ。予定変更、今夜は他の女のところで寝るとするか」

明るい口調だったので、別に不自然ではなかったが、和彦と美里は話が不調に終わったことを知った。

橋口を呼んだのは、セックス相手を左知子に押し付けるために和彦と美里が組んだことだった。さらりとした関係を保つには、セックスをもっと気楽なものにする必要があった。

美里も、左知子の鬱陶しい視線を意識しないでもすむ。ほんとうは、別々のベッドで、それぞれのカップルが性の行為を楽しむことになっていた。それなのに、橋口がこの話から降りた。つまり左知子は嫌われたのだった。

そんなことは左知子にもわかっていた。

口づけされなかったことで彼女の自尊心は傷つけられていた。気の毒そうな眼をして美里が、左知子を見たので、余計のこと彼女は傷付いた。橋口が帰ったあと、三人は白けたふう顔

を見合わせていた。

「ぼくも帰ろうかな。美里一緒に来るかい」
「泊っていけば？ どうってことないんだから」
美里が和彦を引き止めた。 どうってことない。 左知子には意味不明のことばであった。

結局、和彦は引き止められるままにこの夜、二人の部屋に泊ることになった。

美里と左知子はそれぞれのベッドで眠り、和彦はベッドとベッドの間の隙間で薄い夏用掛蒲団を与えられて眠った。

左知子はなかなか寝つかれなかった。

きのう、川越の実家から電話があつて母に、一時休学をするように言われた。

このままでは生計が成り立っていかないのです、母の芳枝は市内でスナック経営することになったと告げた。 商売が軌道にのるまで、父の看病と、スナックの方も手伝つて欲しいと言われ「学資のほうだつてどうなることやら」と付け加えられた。

三年の春まで来ているのに今更、学業を放棄する気にはなれなかった。

左知子は中学校の教員になる夢を持っていた。 その夢も捨てることになる。

美里にもこの話はしていない。

もう一つ、今夜の屈辱的な仕打ちのこともまだ頭の中には残っていた。

赤いスポーツカーと、筋肉だけの男。 その図式に腹を立てた。 いや、セックスアップピールのないおのれの肉体を怨む気にもなった。

それでも明方にはやつと寝入ったようだった。 瞼の裏に、仄かな火の色が映じた。 黒いボトルの中に閉じ込められたゆらめきの火が、眠りに落ちる寸前まで、瞼の内でちろちろしていた。 暗い部屋でのダーティファイヤーゲームのあ

そびは、左知子の心の奥に青白い陰火の翳りを落した。燃えている火ではなく、今まさに消え入ろうとする火であった。

そんな火の始末のことを追っているうちに眠ってしまった。

が、左知子はもう明方近く、わずかに空気を揺るがせている人の気配に何となく目覚めた。

「ふっふっふっ」と吐息に似た息声を聞いた。

押し殺した美里の声であった。

その喘ぎにはかすかではあったが、抑揚の響きがあった。何が行なわれているのか。気だるさが左知子の全身にはあった。

それでまだはつきりとは目覚めていない。

「いいのよ……」そんな、反応を示す囁き声を遠くに聞いた。

やっと左知子はこの場の状況を頭の中に入れた。途端に、眼が開けられなくなった。

ふっふっふっという息声は一つのリズムを持っていった。瞼の裡には朝まだきの仄かな白さが映し取られていた。人と人の重なり合った影が、ゆしみのための時間を分ち合っているのだった。禁欲の時間を強いられた和彦が、いつの間にか美里のベッドの上に忍んだのだ。

その情景ばかりが左知子の脳裡には浮かんだ。この眼でたしかめてやろうという思いがあった。それなのに、左知子の両眼はなかなか開かなかった。

顔は美里のベッドの方に向けられていた。

左知子は小さな体を胎児のように二つに折って寝ていた。眼をそつと開ければ嫌でも、男と女のゆしみのポーズが視野に入るはずだった。見ようと努めた。

その間も、きしきしとベッドが鳴った。

二人は大胆になっていた。

思い切って、左知子は薄目を開けた。まだ部屋の中は薄暗い。午前四時頃の薄明りだけの部屋だった。

ベッドの上で、和彦の裸の尻が動いていた。たしかに何かを刺し貫いていた。体の下の美里の立てられた脚だけが見えた。

美里は両脚を男のために開いていた。

左知子には見えない部分で、男と女のもものが結合されていた。うつすらと開けた眼で把えたものは左知子には余りに残酷な世界であった。

「ふっふっふっ、うっ……」と、美里が感情のうねりを高めて行く。もうそれ以上、結合の行為を見ていられなかった。

左知子は固く瞼を閉じた。

左知子は気付いてはいなかったが、おのれの両腿を固く閉じていた。全身が固くなっていた。とても辛かった。思い切り「わっ」と叫んでもやりたかった。

だが、それも出来ずにいた。

性の機会を与えられない哀れな女の、ヒステリックな叫びのように思えた。

もっと自分が惨めになると思った。

「早く終ればいい、早く終ればいい……」ただ無力な叫びを口の中で反芻（はんすう）していた。いや、いつか憎しみの声に変わっていた。

「二人ともいつかわたしの報復を受けることになるから」と、頭の中で呟いた。

この二人が絶対に許せなかった。

左知子にはわざと見せびらかせているとしか考えられなかった。「うーん！」と初めて和彦が声を洩らした。左知子は射精されたことを知った。「ああ、あの時わたしも同じことを経験しようとしたのに……」春先きの一日のことを思い出ししていた。

自分の体のじゆくじゆくした病巣部にも憎しみが湧いた。左知子は唇を噛み締めていた。

男と女の、かすかな呼気が止んだ。

息が乱れ、登り詰め、拡散して行つた。

穏やかな終息の間が訪れていた。

行為が終つたあとの二人の滑稽な仕種がそのあとに続いた。左知子にはその大真面目のスロ―モーシヨンの動きが読み取れた。

両の耳に、毛布の擦れる音や、ベッドの軋む音がかすかに入つて来た。瞼は固く閉じていたが、二人の動きが視えていた。

先ず、和彦がゆつくりと空間を泳いだ。

ベッドから片足を床の上にと置く。

左知子に気付かれないように、そろそろと手足を動かしているのだった。

間の抜けた、スロ―モーシヨンの操り人形を真似ているのであつた。

美里はたしか、パンティを捨てているはずだつた。それから両足を宙に向け、股間にパンティを嵌め込んだ。このあと、空気の揺らぎがぴたつと止んだ。

本当の休息の時間が訪れていた。だが、左知子はどうとう眠ることが出来なかつた。

美里は朝起き出した時、和彦の寝具を片付けてから、部屋の中間のアコーデオン扉をぴたつと閉めた。左知子にはみんなわかつていた。

二人の顔など見たくもなかつた。

和彦と美里が連れ立って部屋を出てから、左知子は一人で起き出した。陽は高く昇っており、もう午前十一時に近い時間になっていた。

このことがあつた一月ほど後に、左知子は二人のために、ファイヤーゲーム^①を用意した。

和彦のところに、半同棲していた昔の女が訪

れたことで美里が左知子に泣言を言った。

大学の構内で和彦を見つけ、美里の友達顔をして左知子は和彦に詰問した。

「わたしにも手を出したこと、美里に言っただけようか。別に二人は結婚するわけでもないんですよ。美里に訊いたらあなたなんか好きでも何でもないって！」

「止めてくれよ、おせっかいやくのは。今は二人とも自由でいたいってことになってるんだから」

「でも、美里は、もう嫌いって言ってるの。わかった」

「ああ、わかったよ」

そばを通り過ぎる女子学生たちの視線に、和彦は面倒臭そうにことばを返した。

それで、左知子は今度は、美里にことの次第を告げ、和彦と別れることを強要したのであった。両者の間になってトラブルメーカーの役を果したのだった。二人の仲はこじれた。

左知子の思う壺であった。

結局のところ、別れの儀式にファイヤーゲームまで、用意することになった。

二人を罰したのであった。

夏休みが始まる前のある日、左知子は川越に帰る決心をした。病院に入っていた父親が退院し自宅療養することになった。下半身不随の身になり、どうしても看病人が必要になった。

母からも経済の窮迫を訴えられ、学資も差し止められた。とりあえず学校には一年間の休学届を出した。

筑波学園都市を去る前の日、左知子は、橋口ご自慢の赤いスポーツカータイプの車を、学園東大通り際の公園予定用地内で見つけた。

昼間眼にした時、車の助手席には女を乗せて

いた。その時は、横眼でちらと見ただけで佐知子は通り過ぎた。

夜、再び同じ場所に停めてあるスポーツカーを眼に止めた。この夜の左知子は、広い敷地の大学構内をあちこち歩いた。学生生活が今夜で終わりになりそうで、気分が滅入っていた。芸術専門学部のおかれている黒っぽく冷たい感じの建物、中央図書館のある広場では池の淵に坐り込み、ぼんやりと池の面を眺めていた。

梅雨が去り、本格的な夏が訪れようとしていたので、空気はもう湿っぽくなくなかった。

体調はそれほど悪くはなかった。

こんな日ならわたし男たちの相手になれるかも知れないのに。悔いの残る青春の日々に、左知子はそんな哀しいことばを用意した。

あてもなく歩き始めた時、橋口の赤いスポーツカーが眼の端に止まった。

赤い車が好きならいっそのこと火の色にすればいいのに。あたりは暗いのに、赤色だけは天の明りを写して光って見えた。

近付いてみたら無人だった。

乾いた砂地がさくさくと音を立てた。

ボトルの中の陰火のことが不意に頭の中に浮かんだ。車は燃えてはいなかったが、一点の赤い火を灯していた。左知子はその時、ほんとうにこの車に生きた火を点じたいと思った。

まったくあたりには人の気がない。

なお、車に近付き、探ってみたら章の後部トランクの鍵が掛けられていなかった。リッドが浮いていたので、そっと開けてみる。

雑多なものが中には入っていた。

左知子は火付けの道具を探したのだが、それらしきものはなかった。トランクの隅に工具箱があった。ドライバーが入っていたので手にす

る。ガソリンの注油口に眼を付けた。

ドライバーを注油口にさし込み、無理矢理押し開いた。わりと簡単に注油口は壊れた。

ガソリンの匂いが洩れて出た。

注油口にそのまま火を点すことを考えたが、瞬時の爆発になると身が危険なので他の方法を考えることにした。

さつきあてもなく歩いている時、看護婦宿舎近くのゴミ捨場にいくつか粗大ゴミが捨ててあったのを眼にした。

一本の導火線になる紐を手に入れたかった。

左知子は、打ち壊した木机の脚を縛ってあった古い布製のロープを見つけ出した。

赤い車の場所に戻り、ロープを注油口の中に順繰りに送って、たっぷりロープにガソリンを染ませた。ロープの長さは三メートルほどもあった。注油口に先端を差し入れる。

もう一方の端が火口であった。左知子はマッチを取り出した。

死んだように風は止んでいた。

マッチを擦り、火口に点火した。

地上にあったロープが火を運ぶ。しゅるるつるつ、火が走った。

左知子はその場から離れた。

とても素軽い身の運びであった。

後ろも振り向かず走り、三十メートルほど離れた地点の樹木の陰に身を寄せ、火の行方を追った。丁度、ロープの火が注油口にまさに辿り着こうとする瞬間であった。

赤い車はまだ鈍く光っていたが、瞬時に、注油口から火が噴き出し、パッと赤い車体が夜の闇に浮いて出た。

どーんっ、低いが力強い音だった。

もう、赤い車は完全に火に包まれていた。

「ダーティ・ファイヤーゲーム」の火の明りを
はるかに超えていた。

暗さの中の赤い一点はボトルの中の火の遊
びを真似たものだったが、眼の前にある火は
夜空を焦がす壮大なかがり火になっていた。

これだけの火を見れば充分だった。

学風都市を去る最後の夜に、左知子は壮大な
火の遊びをやつてのけたのだった。

学園都市はあまりに宏大なので、夜は無人数
帯になる。左知子は誰れにも会うことなく、こ
の時、女子寮に帰り着いた。

翌朝、本や、身の回りのものをリュックサツ
クに詰め、左知子はこの街を去った。

早目の夏休み、期末考査も終わったので、早々
と帰郷する女子学生の一人に見えた！。

(第三章 了)